

# 中東地域における地政学リスクと その影響

鈴木 一人

東京大学 公共政策大学院  
国際文化会館 地経学研究所

# 不安定さを増す中東地域

- 2023年10月7日の衝撃
  - パレスチナ問題が解決しなければ、中東の安定は望めない
- イスラエルの「自衛」と脅威の排除
  - ハマス撲滅のみならず、ヒズボラ、イランの脅威の排除＋シリアのアサド政権の崩壊
- イランの核開発で何が起きているのか
  - 2018年の米による核合意離脱に対抗する措置としての高ウラン濃縮
  - ゼロ濃縮なのか、濃縮の権利なのか
- 湾岸諸国の曖昧な位置づけ
  - ガザ地区での紛争やイスラエル－イラン紛争におけるミサイル飛翔の黙認
- 米中の覇権争い？
  - AIをはじめとするエネルギー大量消費型産業の集積と米中競争
  - 資源を巡る争いというよりは、次世代産業のポテンシャルとしての中東の争い

# イスラエルをめぐる問題

- 内政上の問題
  - 完全比例代表制による不安定な政権運営→極右政党・超正統派政党との連立
  - イスラエル全体の右傾化(中道左派の衰退)と対パレスチナ強硬派の圧力
- 中東での脱孤立化
  - アブラハム合意、I2U2、IMEC: アメリカ主導の脱孤立化枠組みの設置
  - 10・7以降→湾岸諸国の沈黙、インド、欧州の支持、アブラハム合意は破棄せず
- 過剰な「自衛」概念の発動
  - ハマスに対する「自衛」→ハマスを撲滅→脅威の排除
  - ヒズボラ、イラン、(ドルーズ派保護を名目とした)シリア攻撃→複数正面の戦争
- 防衛中心の軍事システム
  - アイアンドームの有効性とコスト負荷→飽和攻撃に対する限界
  - イランのレジームチェンジを達成するだけの能力に欠ける→米軍の支援とサボタージュ
  - イラン、ヒズボラに関するインテリジェンスの高さとハマスやその他に対する欠如

# イランをめぐる問題

- 2018年の第一次トランプ政権の核合意離脱と一方的制裁
  - 2019年から核開発の再開→アメリカとの交渉のレバレッジ
  - 平和的利用では合理化できない状況だが、核兵器に直結する開発はせず
- 2024年ライーシ大統領の死去とペゼシュキアン大統領の就任
  - ハメネイ師の後継問題が再浮上→欧米との交渉による制裁解除の方針
- 米イラン交渉の可能性
  - 5回に渡る交渉が進展→イスラエルの空爆と米国による空爆
  - イランは交渉する意思はあるが、米国に対する信用を失う→安全の保証が不可欠
- ホルムズ海峡の封鎖
  - イランにとってのNuclear Option→中国を含む世界を敵に回す覚悟が必要
  - 段階的な封鎖は可能だが、交渉を求めるイランは事態をエスカレートする意思を持たない

# 中東における地政学的リスク

- **イスラエル–イラン紛争の再燃**
  - イスラエルによる空爆、サボタージュの可能性
  - イランのレッドライン→ハメネイ師をはじめとする政府首脳への暗殺
  - イスラエルは単独ではレジームチェンジできない
- **シリアを巡る問題**
  - ドルーズ派とベドウィンの小競り合いを口実としたイスラエルの介入
  - シリアの分断と緩衝地帯の拡大→トルコとの摩擦
  - 中東における対立軸がイスラエル–トルコにシフトする可能性
- **パレスチナ問題**
  - イスラエルのガザ侵攻、ヨルダン川西岸の入植活動は続く
  - 「一国家解決」をアラブ諸国が認めるかどうか→紛争に発展する可能性は低い

# 日本への影響

- 中東地域の安定
  - イスラエルを中心とする紛争の多軸化→ペルシャ湾への影響は限定的
  - アラブ諸国の沈黙→パレスチナ問題が湾岸諸国に影響する程度は低い
  - イスラエルの孤立化→世界的な非難が高まりつつある
- 中東における米中対立の可能性
  - 安全保障問題に関する中国の介入は少なく、米国の影響も限定的
  - AIなど新興技術を巡る争いの方が重要になりつつある
- イスラエルとどう付き合うべきか
  - 当面、シリアにおける紛争が最大の問題となる→トルコとの緊張の高まり
  - ガザ地区における紛争の継続
  - 国内政治事情(超正統派の離脱)を踏まえた対応が必要